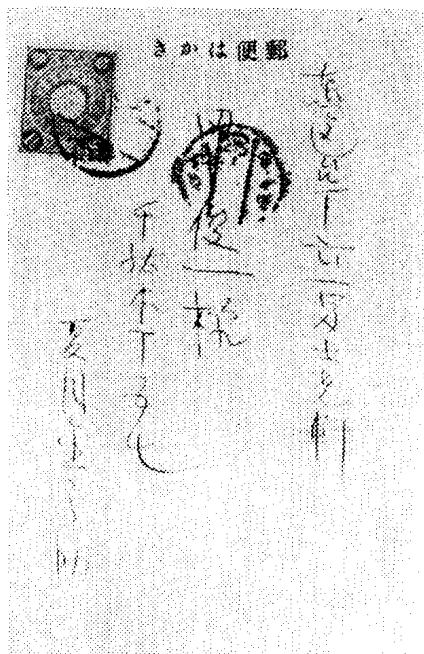


## 漱石の未発表水彩画絵端書

著者	古川 久
雑誌名	日本文学誌要
巻	19
ページ	43-47
発行年	1967-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019207">http://hdl.handle.net/10114/00019207</a>

古川久

書端絵水彩画発表の漱石



表面 A 二八七

りと梅の花」始め五句が詠まれ、高浜虚子が松山で会った時は漱石が左手に弓を持っていたと述べているなどと書いた。それはこの辺の描写が猫の口を借りた漱石の自嘲の言葉と受取られるからで、後年「道草」の材料になった外遊以後の漱石の精神生活は、実に惨憺たるものであった。まるで噴火口を求めて煮え沸っている溶岩のよう、漱石の内部に鬱積したものは表現様式を求めて、漱石を揺り動かす。『吾輩は猫である』はその結果やっと探り当てられた、写生文から発展した作品であった。

さて遠慮会釈のない猫は、さらに続けて主人の気まぐれをからかい始める。

此主人がどういふ考になったものか吾輩の住み込んでから一月許りの後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあはただしく帰つて来た。何を買つて来たのかと思ふと水彩絵具と毛筆とワットマンといふ紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果して翌日から当分の間といふものは毎日々々書齋で昼寝もしないで絵許りかいて居る。然し其かき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。

『吾輩は猫である』を読んだ人は、その第一回目に「何でもよく手を出したがる」主人が、俳句・新体詩・英文から弓・謡・ヴァイオリンなどにこり、しかも「どれも物になって居らん」と評されているのを記憶して居られるに違いない。今度の全集に注解を補訂するに当り、私は例えば新体詩の項には漱石が「水底の感」だの「従軍行」だの、または「鬼哭寺の一夜」だのを作り、「従軍行」は雑誌『帝国文学』の明治三十七年五月号に、発表させしことを記した。或いは弓の項には明治二十七年の俳句に、「大弓やひらひら

そして「友人で美学とかをやつて居る人」にかつがれたり、日記に水彩画のことを書いて又候猫に「主人は夢の裡迄水彩画の未練を背負つてあるいて居ると見える。是では水彩画家は無論夫子の所謂通人にもなれない質だ」とこき下ろさせている。子規の残した文章会「山会」での朗読用に作られたこの第一回分には、主人の苦沙弥も美学者の迷亭も、猫同様名前さえ与えられていなかった。しかし



二八七A

この水彩画の件りも漱石自身の経験に基き、明治三十七、八年頃の「断片」七には、殆んどそのまま素材が書き留められている。また「書簡集」を見ると明治三十七年一月三日附橋口貢宛のものから、自筆水彩画絵端書が現われ始める。

小宮豊隆「漱石と画」（『漱石 寅彦 三重吉』所収）によると、

是は恐らく橋口貢、その弟の橋口五葉、寺田寅彦などの刺激によるものに相違ないが、漱石は当時さういふ人人と、頻に自作水彩画の絵葉書を交換した。それは今日でもちゃんと保存されてゐる。また当時漱石が、その中に水彩画をかいた、ポケット用のスケッチ・ブックも保存されてゐる。

とあり、同じく『夏目漱石』の四五『吾輩は猫である』には、先に挙げた「断片」にふれて、

残念なことは、この「断片」第七がいつごろ書かれたものであるか、まるで見当がつかないことである。然しここに書かれてゐる水彩画の稽古が、『猫』第一の、言はば中心になつてゐる点から言つて、是は『猫』が書かれる、ほんの少し前に書かれたものではないかと、想像することができなくもない。然し漱石が水彩画の絵はがきを、橋口貢や寺田寅彦などと特に頻繁に交換してゐたのは、明治三十七年の夏休みで、その情性が十二月まで続き、（中略）この「断片」はことによると十一月前後に書かれたものなのかも知れない。



二九五A

と見える。

このようにして水彩画もやはり漱石がロンドン留学中に掴み得た「自分本位」(『私の個人主義』)の、その自分をいかにして表現するかの一試みであったと言えよう。この意味で「漱石が『猫』をかき『倫敦塔』をかき、段段創作に熱中するに従って、次第に漱石の頭の中から、その姿を消して行つた」(「漱石と画」)のは当然であろうが、『吾輩は猫である』発表前後の漱石の気分を知る上には、重要な存在であることも事実である。そしてさらに後年に至って油画を描いたり南画に打込んだりする第一歩として、水彩画の資料は等閑に附しがたい。

今度の全集で新書簡の増補されたものは百通を越えたが、中で十数通は私の周囲の人々からも提供され、岡三度それを報告して来た。この度北山正廸・鎌倉幸光両氏に聞いたと岩波書店の長田幹雄氏に

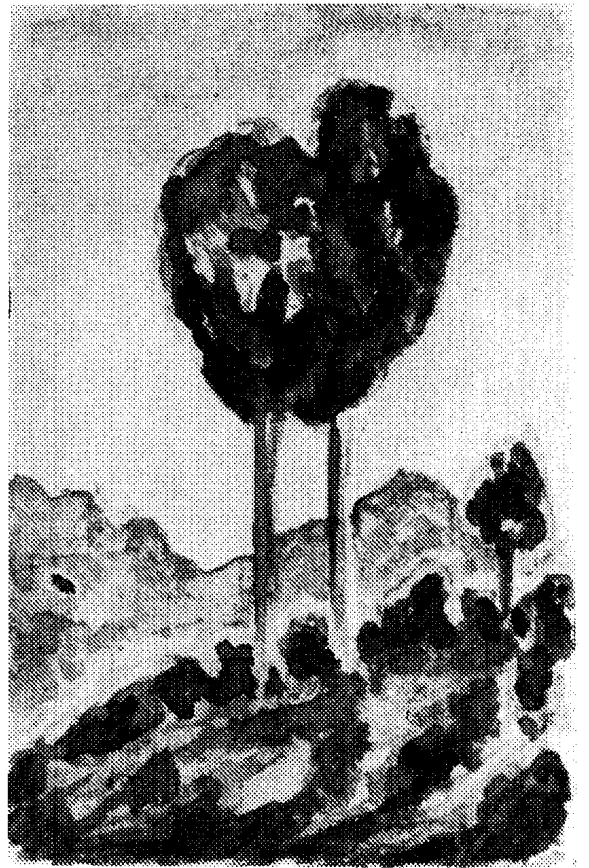


二九八A



三〇四A

教えられ、宇田健君に写真撮影の労を取って貰うため同行し、新潮社に佐藤俊夫氏をお訪ねした。氏が所蔵して居られるという、水彩画絵端書を拝見するためである。佐藤氏は快く撮影を許して下さったが、示された計六枚はすべて全集未収録の新資料であった。宛名は皆田口俊一で、実は今度の全集の新資料に明治三十八年一月二日附自筆水彩絵端書を書簡番号二九二として採録したもの、宛名人の素姓が調べられないために注解を施すことができなかった、その当人である。つまりこれらは二九二番と一連のものとなり、スタンブによると明治三十八年一月四日・同十五日・同二十八日・二月五日・同十二日で、一通だけが判読できない。しかし二九二番の書き出しに、「君の名を忘れたのではない。かき違へたのだ失敬」とあるが、それは田中俊一と誤記しているところから、スタンブで三十日だけは読めるので、一応三十七年暮と推定して置く。



三〇六A

そこでこれらを全集補遺形式で排列すると、左のようになる。

二八七A

明治三十七年十二月三十日 金 午後四時四十分 本郷区駒込千駄木町五十七番地より 本郷区台丁六一富士見軒田中俊一へ

〔絵はがき 自筆水彩画〕

君の画は大変うまい。僕は多忙で画をかいて居られない。是は愚作ですが旧い奴があつたからあげます。出来たら又よこして下さい。深江君もよこして呉れた。深江君も僕よりうまい

二九五A

明治三十八年一月四日 水 午後五時 本郷区駒込千駄木町五十七番地より 本郷区台丁富士見館田口俊一へ 〔絵はがき 自筆水彩画〕

水彩画〕

君の様に絵端書の連発ではちと返事に困る。是は今少しのひまをぬすんでかいた。いたづらです。髪は白髪の様だが是は被りものゝ積りだ

二九八A

明治三十八年一月十五日 日 午前九時五十分 本郷区駒込千駄木町五十七番地より 本郷区台丁富士見館田口俊一へ 〔絵はがき 自筆水彩画〕  
何ダカ分ラナイ画ニナリマシタモトハ「ブランギン」デス

三〇四A

明治三十八年一月二十八日 土 午後五時十分 本郷区駒込千駄木町五十七番地より 本郷区台丁富士見館田口俊一へ 〔絵はがき 自筆水彩画〕



三〇九A

木町五十七番地より 本郷台町富士見館田口俊一へ〔絵はがき  
自筆水彩画〕

もう少し甘く書く筈の処例の如く出来損へり

### 三〇六A

明治三十八年二月五日 日 午後一時二十分〔?〕 本郷区駒込千駄木  
町五十七番地より 本郷台町富士見館田口俊一へ〔絵はがき  
自筆水彩画〕  
〔山を背景に樹木三本を描き、文章なし〕

### 三〇九A

明治三十八年二月十二日 日 午後五時 本郷区駒込千駄木町五  
十七番地より 北豊島郡巢鴨村大字新田六六千住方田口俊一へ  
〔絵はがき 自筆水彩画〕

僕の肖像を鏡へ向いてかいたらこんなのが出来た。中々好男子だ

最後の自画像は、今度の全集の内容見本表紙に使われたものとよ  
く似ているので、見覚えがあると思う人もあろう。それは十日前の  
二月二日附土井晩翠宛の分で、『書簡集』に三〇六番として収まっ  
ており、下段には左のような言葉が記されている。

自分の肖像をかいたらこんなものが出来た何だ〔原〕が影が薄い肺  
病患者の様だ。君が僕を鼓舞してくれるから今にもつと肥った  
所を書いて御目にかける現在の顔は此位だ

しかしこの方も余り肥ってもいないから、多分同時に描いたものを  
二人にそれぞれ宛てて出したのであろう。

以上で紹介を終るが、もし田口俊一氏について御存じの方は御教  
示戴きたく、所蔵者佐藤俊夫氏の御好意に対し厚くお礼を申し上げ  
る。

附記——この機会に私の手を経た書簡新資料をまとめて報告し  
て置くと、『東京女子大学日本文学』第27号に「漱石の未発表  
書簡」として十二通を紹介し、これらは新全集に収録された。  
その後『図書』第220号に「虚子宛漱石書簡拾遺」として三通を  
『杜の会会報』第12号に「漱石書簡の新資料」として一通を、  
それぞれ発表したのが、今回の分ともども近く刊行の『漱石全集  
索引』に附載の予定である。

なお漱石の水彩画で、私のこれまでに見ることができたのは  
小宮家・寺田家及び小林勇氏（橋口五葉宛のもの）方に、分蔵  
されている。できればこれらの全部がカラー写真版で一望され  
るような、画集出版の機会が到来するのを希って止まない。

(42・11・15)